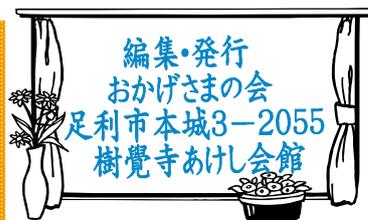


# おかげさま



## ひかり 春来たり 今朝の陽光 いのち尊し

あなたは、『ヌチヌグスージ』という言葉を知っていますか。カタカナで書かれているところを見ると、「日本語ではないな」と思ったかな。これは厳然とした日本語です。ただし共通語と呼ばれている（日本語には、関東・東京地方の方言と全国各地から入ってきた方言が入り混じっている言葉をもとにした共通語はあるが、正確な意味での標準語はないと聞いている）、いわゆる日本語ではありません。方言とよばれる日本語です。沖縄地方の言葉です。



『ヌチヌグスージ』は、サンマーク出版から、2004年10月15日に初版本が出された絵本の副題です。草場一壽さん作、平安座資尚さん絵の『いのちのまつり』という楽しい絵本です。

春になると、日本はもとより東アジアの各地で、ご先祖様(さきに逝かれた方たち)をご縁とさせていただき、私の今の「いのち」を喜び、様々なつながり確かめ合い感謝する行事が行われてきました。中国の『清明節』、日本の『彼岸会』、そして沖縄の『ヌチヌグスージ(いのちのまつり)』です。

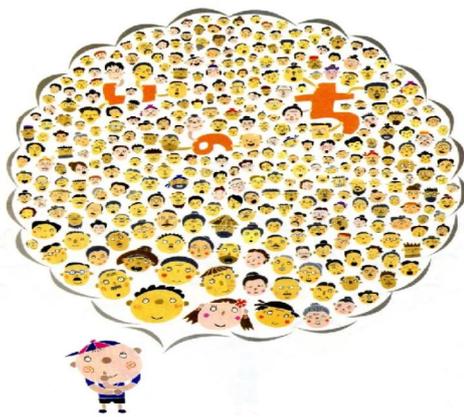
作者の草場さんは、本のはかま(本のカバーの下の方に巻いてある帯状のもの)に、

「ヌチヌグスージ」とは、沖縄の方言で、“いのちのお祝い、いのちのお祭り”という意味です。始まりも終わりもない悠久の時の流れのなか、広大無辺な生命のつながりが今ここにある——。自分自身が奇跡の存在であ

ること、与えられた生命を光り輝きながら共に生きぬくことが、「ヌチヌグスージ=いのちのまつり」であるという思いを絵本に込めました。

とっています。

「いのちが見えずらくなっています」といった人がいます。あなたは、間違いなく、いのちが見えていますか？ いのちの繋がりがみえていますか？ この関わりから逃げ出そうとしたり、否定できると考える人たちが見受けられます。その間違った考えを修復しようと働くのが、仏法なのです。いのちといのちの関わりを見直してゆく、頷かさせられていくのが、お聴聞なのです。



示時衆偈 廣如上人

木畫尊像拜之如真  
一念往生信之如実  
報恩称名寤寐勿忘  
謝徳勤行晨昏勿廢  
三時飲食家属共用  
一時佛飯豈疎懶哉  
我座常拂何況佛室  
我衣時裁何況佛帳  
香須清浄燈須明朗  
勿使花枯勿使器穢  
更重佛教且從世教  
莫妨家職深思量之



木画の尊像 之を拜すること

真の如くせよ

一念の往生 之を信すること

実の如くせよ

報恩の称名

寤寐に忘ること勿れ

謝徳の勤行

晨昏に廢すること勿れ

三時の飲食 家属と共に用うる

一時の仏飯 豈に疎懶ならん哉

我が座 時に払う

何に況や仏室おや

我が衣 時に裁つ

何に況や仏帳おや

香は須べからく 清浄なるべし

燈は須べからく 明朗なるべし

花をして 枯ら使むること勿れ

器をして 穢が使むること勿れ

更に仏教を重んじ

且は世教に従がえ

家職を妨ぐることを勿れ

深く之を思量せよ

# あけし酔話

## お釈迦様の生涯 出家

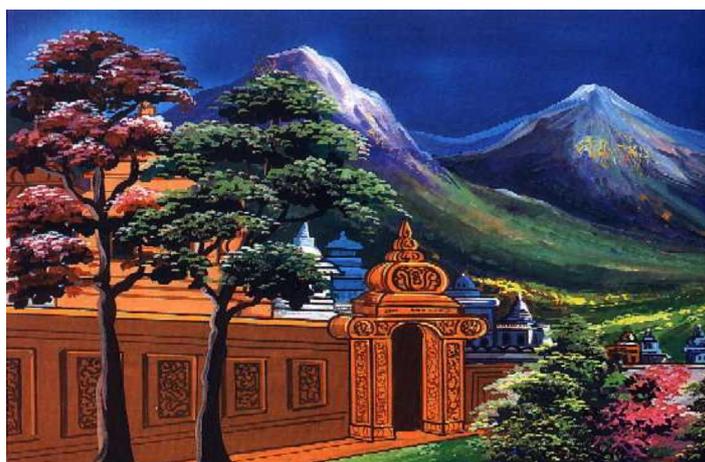


結婚後十年ほど経って、シッダッタとヤソーダラーの間に息子ラーフラが生まれました。これでシッダッタには、出家できる条件が一応整ったことになったのです。シャカ族の長を継ぐべきシッダッタの、後継者が誕生したからです。

二十九歳になっていたシッダッタは、ある夜、愛馬カクタカにまたがり、従者チャンナを伴って、ひそかに宮殿を抜け出しました。

城を出て東方に進み、コーリア国とマッラー国との境を流れる河を渡り、そこで剃髪をし、袈裟をまとして、出家修行者としての第一歩を踏み出したのです。

チャンナは、何とか出家を思いとどまらせようと懇願しましたが、「生と死との彼岸を見ぬ限り、再度カピラヴァトウの都には帰らじ」と、チャンナを宮殿に帰しました。そういった伝説に残るほどの決意をもって、シッダッタは旅立っていったのです。



### 修行

生まれ故郷を後にしたシッダッタは、ガンジス河を渡り、当時、大国であったマガダ国の首都、ラージャガハ(王舎城)へと向かいました。その頃のラージャガハは北インドの政治・文化の中心で、こうめいなしゅうきょうか



・しそうかが集まった都市でした。

さまざまな情報を得たシッダッタは、名声をほしいままにしていたアーラーラ・カーラーマとウッタカ・ラーマプッタという二人の出家者に師事し、禅定の修行をしました。ところがシッダッタは、短期間でアーラーラが体得していた境地に達し、またウッタカが体得していたのと同じ境地に達してしまいました。けれども、どちらの禅定も、共に涅槃(ニルヴァーナ)に達する道ではないことを知り、シッダッタは二人の師のもとを立ち去りました。

【つづく】



# あけふ あれこれ

## ヒイラギ (柎)

突然の11月の雪には驚きましたが、樹々も重たい雪に慌てているように思えました。そんな時、ふと通りかかった道沿いで、優しい爽やかな香りに気づきました。すぐ脇にあった柎に小さな真っ白の可愛い花が咲いています。「こんなに可愛い、



香りの花だったか」と、子供の頃の家の部屋の前に、そう云えば大きな柎の木があり、花が咲くといい香りがして、大好きな木でした。もうすっかり忘れていたその頃の家がほのぼのと思い出され、懐かしさでいっぱいになりました。香りって不思議な力を秘めていますね。とてもうれしかったです。

**ヒイラギ (疼木・柎) モクセイ科モクセイ属**

**自生・植栽。常緑小高木・高さ4~9m**

葉の縁には、先が鋭いとげになった切りこみがあり、このとげに触ると痛い、疼らぐことからついた名前といいます。木は老木になると葉の切りこみが浅くなり、まるい葉が多くなります。仲間のヒイラギモクセイ (柎木犀) は本種とギンモクセイ (銀木犀) の交雑種で、葉の形も中間的です。花もよく似ていますが、ヒイラギモクセイのほうが香りがよいことで、区別することができます。

11月~12月頃、葉のつけ根に5mmくらいの白い小花が多数集まって開きます。雌雄異株で雄株の花は2本の雄蕊が発達し、雌株の花は花柱が長く発達して結実します。実は長さ12~15mmになる核果で、翌年6~7月に暗紫色に熟します。

柎は冬の木の代表という意味の作字です。日本では庭木、材は工芸用、特に櫛、算盤玉に用います。